

障がい者に対する乗馬療法の歴史と現状 およびその効果について

0907030

小嶋 穂波

【目的】

乗馬によって様々な健康増進を求めることを乗馬療法または乗馬セラピーという。身体面や心理面に障害を持つ人を対象に、運動機能の回復を促進したり、抑うつ感や自信の喪失といった情緒障害を改善することを主な目的としている。本研究では、動物介在療法および障害者乗馬の歴史について調べることで、現状を知り、日本での乗馬療法の課題と解決策について理解を深める。また、実際に乗馬療法を行っている施設へ行き、その治療効果について検証することを目的とする。

【方法】

乗馬療法の歴史と現状については、本やインターネットにより調べた。乗馬療法の効果の検証については NPO 法人障害者乗馬センター乗馬セラピー倶楽部でのレッスンを記録した。記録の期間や場所については下記のとおりである。期間は 2012 年 10 月～11 月初旬。記録用紙を用いて、利用者の「表情」・「姿勢」・「行動」・「視線」の変化を記録した。記録用紙は Bertoti(1988)が用いたものを川添(2009)が改変したものを使用した。対象者は乗馬セラピー倶楽部の利用者で男性 3 名、女性 1 名の計 4 名であった。

【結果と考察】

(1) 歴史と現状

乗馬療法の歴史は古く、一説には古代ローマ帝国時代にまで起源をさかのぼると言われている。1969 年にはイギリスで、1971 年頃には北米で現在につながる全国的な乗馬療法の組織が誕生し、本格的な組織的取り組みが

開始された。一方日本では、1992 年に北海道大滝村の福祉法人大滝わらしべ園で初めて乗馬療法への取り組みが行われた。1988 年には、乗馬療法のインストラクターを養成する学校を開設した。現状については、日本の代表的な障がい者乗馬の組織として RDA Japan と JRAD がある。RDA Japan の関連団体として全国 RDA ユニットがあり、現在は 7 つの団体がユニットとして認定されている。JRAD は全国に支部団体があり、合計 16 の団体が支部として障害者乗馬を支えている。

(2) 効果と課題

半身まひのある利用者について、乗馬前は曲がって固まっていた右ひじが、乗馬中に伸びる場面が見られた。乗馬療法の身体的効果として Mayberry (1978) と Henriksen (1971) が考えた筋緊張の緩和(山田, 2001 による)があったためと言える。また自閉症の利用者について、乗馬前ほぼ無表情であったが、乗馬中笑顔や声を出して笑ったりする場面が見られた。乗馬療法の効果として幸福感の向上(Mayberry, 1978)が見られたためと考えられる。知的障がいをもつ利用者に関しては、特に本人の感情表出に効果があるとわかった。

課題として乗馬セラピー倶楽部では週に 1 回の頻度で通う利用者が多く、効果が見えづらいという現状があるため、施設内に馬場を設けることによって、希望に沿った形で乗馬を楽しめるものにする必要がある。また、日本では乗馬を治療に用いるというイメージがない。インストラクターの普及や医療との連携によりさらに専門性を高めることで乗馬療法の治療的地位を確立していくべきである。

(指導教員 豊村 和真 教授)